

教育時報



▲運動会 6年生 表現「龍翔鳳舞」の演技より(東京都豊島区立清和小学校)

教育を 思う

学校を元気にする～日々思うこと～

全国連合小学校長会会長 / 東京都中央区立久松小学校長 植村 洋司

今一番大事なことは「学校を元気にする」ことである。そのために、まず、校長の力量が問われる。「組織はリーダーの力量(器)以上には伸びない」。校長は、学び続けなければならない。

改めて教職の魅力を開き直すことが必要である。教職の魅力とは何か。子供たちの成長を目の当たりにし、実感できる素晴らしい職である。苦労も多いが、やりがいに満ちた仕事である。教師は、もっとリスペクトされるべき存在であると常々思う。

現在、学校現場は、勤務時間管理に厳しい。時間にルーズになることを推奨するつもりはないが、極めて勤勉な日本の教師をもっと信頼し、タイムカードを活用するなど「時間管理」を自己管理

していくシステムにできないか。学期末が近付くと、「教科書が終わらない」という声が職員室のあちこちから聞こえてくる。皆一生懸命なのである。しかし、そもそも「教科書は隅から隅まで終わらせないとイケない」ものなのか。大事なことは、「教科書で何を教え育てるか」ということであるはずである。

今改めて、学校の存在意義や役割を問い直す必要がある。大事なことは、適切な役割分担である。「内」と「外」を明確にする。学校に何でも持ち込む文化や風土、風潮を払拭することが求められている。「教育という大河の最初の一滴は家庭である」という言葉を聞いたことがある。何よりも大事なことは、「家庭の教育力」を高めることである。

Content

特集 これからの資質・能力の育成 …… 2	
(総論) これからの社会に求められる資質・能力と学校教育の役割	
北 俊夫	
(国語) 小林 敬之 / (社会) 裏田 雄大	
(算数) 杉本久美香 / (理科) 鮫島 圭介	

学習指導最前線(特別活動) …… 8	和久井伸彦
わたしの学校経営 …… 10	酒井 由江
おすすめの本 …… 11	渡辺 敦司

緊急
発行

次世代の学校教育を考える 有識者 24 人の提言

★特別頒布価 2,000円(税込)
★B5判 116ページ 1色
【発行】
一般財団法人 総合初等教育研究所



執筆者紹介(五十音順)

安彦 忠彦	辻村 哲夫
天笠 茂	鶴巻 景子
植村 洋司	中村 和弘
角屋 重樹	中村 典生
北 俊夫	名古屋恒彦
後藤 豊郎	葉倉 朋子
小林 幹夫	福田 俊彦
阪本 秀典	松川 禮子
清水 美憲	水川 和彦
杉田 洋	村川 雅弘
田中 博之	渡辺 敦司
月岡 正明	渡辺 秀貴

- 未来を担う子供たちを育てるために
- 次期学習指導要領の論議が始まる今だからこそ

●ご注文は株式会社文溪堂 特約代理店まで (一般書店では取り扱っておりません。)
【お問い合わせ】 一般財団法人 総合初等教育研究所 | 058(398)6633 〒501-6297 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1

原稿募集

【わたしの学校経営／わたしの学級経営】
掲載イメージは本誌10ページ参照

本文：1000～1200字(タイトル含まず)
※学校や学級を紹介する写真を1枚添付してください。

【おすすめの本】 掲載イメージは本誌11ページ参照

本文：450字(書名／著者／出版社含まず)
※原稿と同時に本の表紙写真を添付してください。

- 原稿は下記メールまで送信ください。
ご自身のお名前、住所、電話番号を必ず明記ください。
✉skk@sokyoken.or.jp

編集 後記

『教育時報』は、今回から「オールカラー」「ワイド判(B5からA4)」でお届けします。この特長を生かして、読みやすい誌面を心がけます。

- 【特集】では、発行する時期に話題になっているテーマを取り上げてまいります。今回は「これからの資質・能力の育成」です。
- 【学習指導最前線】では、教科調査官の先生方に、教育の最前線の話題を提供いただきます。
- 【わたしの学校経営／わたしの学級経営】ならびに【おすすめの本】では、先生方からの原稿を募集します。読者の皆様といっしょに創り上げていく情報誌を目指します。引き続き、よろしくお願い申し上げます。(睦)

教育時報 No. 134

企画・編集 一般財団法人 総合初等教育研究所
 〒501-6297 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1 Tel.058-398-6633
 〒112-8635 東京都文京区大塚3-16-12 Tel.03-5976-1309
 〒578-0903 大阪府東大阪市今米2-7-24 Tel.072-966-2111(代)

発行所 株式会社文溪堂
 〒501-6297 岐阜県羽島市江吉良町江中7-1 Tel.058-398-1111(代)
 〒112-8635 東京都文京区大塚3-16-12 Tel.03-5976-1311(代)
 〒578-0903 大阪府東大阪市今米2-7-24 Tel.072-966-2111(代)

総論

これからの社会に求められる
資質・能力と学校教育の役割



(一財)総合初等教育研究所参与
北 俊夫

1 新時代を切り拓く資質・能力

我が国はいま、例えば、人口減少に伴う労働力不足や産業構造の再構築をはじめ、地球規模の気候変動や食料自給率の低下、安全保障をめぐる国際情勢の不安定化など、解決すべき様々な社会課題に遭遇している。

社会課題が山積し、先行きが不透明な状況下において、学校教育でこれからの社会を担う子供たちにどのような資質・能力を身に付けることが求められるのか。これからの社会に求められる資質・能力を明確にし、それら子供たちに確実に育むことは学校教育の重要な役割であると考えられる。

今小学校で学んでいる子供たちが社会で活躍する10年後、20年後には、例えば、情報機器を道具として駆使し情報を主体的に活用する能力、多様な人々と豊かなコミュニケーションを展開しながら共に生きていく力、社会の課題を見だし、協働しながらよりよく解決する力、新しいモノや価値などを生み出す創造力、よりよい社会の形成に参画し貢献する資質や態度、更に生涯にわたって学び続け自己を向上させようとする意欲や態度などが一層求められるようになると考えられる。

ここでは、これらのうち特に「創造力」に焦点を当て、その必要性や創造力を育む学校教育の在り方について論じていきたい。

2 なぜ「創造力」が必要なのか

「創造する」とは、これまでにない新しいモノを生み出すことである。ここでいうモノという概念には、目に見える物質的な物のもとより、考えや考え方、価値や有用性など目に見えないモノも含んでいる。これらを生み出すための力が「創造力」である。

これからの社会において「創造力」が求められることには次のような理由がある。

我が国は明治以降、大正、昭和を通じて欧米諸国に追いつき追い越すことを目指してきた。その結果、日本社会は欧米諸国に肩を並べ、今ではそれ以上に成長・発展してきた。

国民の生活も以前と比べて豊かになった。ところが、平成に入った頃から社会経済活動の成長にかけりがみえはじめた。こうした状況に危機感を抱いた課題意識の高い企業では、早期に開発部門を立ち上げ、資金と人材と時間を投入して新たな商品の開発に力を注いできた。こうした場で求められるのが既存の概念にとらわれない、新しい発想に基づく豊かな創造力である。

これからの社会は、想定されない劇的な変化と転換が予想される。様々な場面でロボットが活躍し生成AIにとって変わり、人間によるこれまでと同じ対応は必要なくなる。そこでは人間らしい感情の伴った対応力や発想を変えた柔軟な開発力が求められる。人間にしかできないことは何かを明らかにし、それを開発・実現していかなければならない。

我が国は、少子高齢化をはじめ労働力不足、農村や漁村の人口減少、農業や水産業などの衰退、食料自給率の低下など、様々な社会課題に直面している。課題先進国日本がこれまで直面したことのない課題をいかに解決するか。世界から注目されている。ここで必要となるのが、問題解決能力とともに新たな考え方や解決策を発想する創造力である。創造力は既存のモノをまねる、習う活動を越えた、新たな知識や考えなどを造る力である。

子供たちが持続的に発展させる社会の担い手として成長していくためには、学校教育の場で柔軟かつ豊かな創造力を身に付けることがこれまで以上に求められるものと考えられる。

3 創造力を育む学校教育の要件

創造力は、習得した基礎的・基本的な知識や技能を活用するとともに、主体的に学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質・能力を発揮することで育まれる。総合的な意味あいをもっている。学校教育において、子供たちにこれからの社会に必要とされる創造力を育むには、次のような視点から学校経営を改革・改善する必要がある。

まず、学習指導要領が示す基準を踏まえ、各学校が個性と特色のある教育課程を編成・実施することである。画一性や横並び意識を排除し、校内の全教職員が創意工夫を発揮して学校全体の教育活動を創造的に計画・展開することが重要である。自由で伸び伸びした教育環境の中で、子供たちはその雰囲気を感じ取り、自ら個性のある創造性を発揮するようになる。型にはまった指導や硬直した学習活動の中では、豊かな創造力は育まれない。

次に、全ての教職員が教育活動を改革・改善しようとする意識をもつことである。学校にはややもすると前例踏襲を重視する雰囲気や傾向がみられるが、マンネリ化を排し、常に新たな課題意識をもって挑戦し続ける意欲と創造的な知恵とエネルギーが求められる。PDCAサイクルに基づいて教育活動を点検・評価し、その結果を改善に生かすことは教師の創造的な営みそのものである。学校や教師が教育活動を創造的に改革・改善することにより、子供たちに創造力が育まれる。

そして、全教職員が子供観をはじめ授業観や評価観などを共有することである。教職員一人一人の個性や多様性を認めつつ、教育課程の実施においては子供の捉え方、指導の在り方、授業の考え方など共通の価値観に立つことが求められる。教職員一人一人が組織の一員としての自覚をもち、組織体としての学校の教育機能を高めたい。

更に、創造力は、知的な好奇心が基盤になることから、子供たちの興味・関心や探究心を誘発するような教育環境を整備することである。教材・教具や学校図書館、ICT、掲示物など物的な環境は創造力の育成と関わりが深い。教育活動全般における、子供の思考や理解を刺激し、新たな学びを誘発する仕掛

けを工夫したい。また、子供同士や教師との関係など人的な環境にも配慮する必要がある。

以上の視点から、日々の学校教育の在り方や役割を改めて確認し、創意工夫のある創造的な教育活動を展開することにより、子供たちに創造力が育まれるものとする。

4 創造力を育む授業の課題

子供たちの学校生活の中心は授業である。このことから、最後に創造力を育む授業改善の課題を4点提案することとする。

1つは、現在社会や自然がかかえている課題や将来想定される課題を取り上げ、それらの解決に向けて興味・関心や意欲をもたせるとともに、知的な好奇心や探究心を高めるようにすることである。解決策を考えることや新たな開発への情熱をもつことが創造力育成の基盤になる。

2つは、自らの考えや発想などをもとに、友達と協働しながら問題や課題を解決する活動を重視し、自力解決力と協働的解決力を育成することである。課題解決に当たっては、子供一人一人において体系化されている各教科等の学習で得られた知識や技能を生かすようにする。

3つは、自ら発想したことや新たに生み出したものを周囲の人たちに分かるように公表したり提案したりする活動を重視することである。表現活動は創造したり発想したりしたことを確かにする。また、多様な友達と協働して取り組むことにより、新たなものや考え方、価値を生み出すきっかけが生まれる。

4つは、ややもするとバラバラな状態のままになりがちな各教科等で習得した知識や技能を一人一人において統合化し、自らの学び方や生き方の体系に組み入れるようにすることである。このことにより、創造力を育む基盤が創られ、創造力が生きて働くものとなる。

これからの各教科等の学習指導において、以上の諸点を重視することにより、子供たちに将来の社会においても生かされる創造力が育まれるものとする。

国語科

これからの国語科に求められる
資質・能力と授業のアイデア



岐阜県各務原市立鷺沼第二小学校
小林 敬之

1 これからの国語科に求められる資質・能力

コロナ禍を経て、児童の様相は多様化し、学校を取り巻く環境も一変している。その中で、従前の教師主導の一斉授業では、限界がある。授業の在り方を根本から見直す必要があると感じた。

また、既存の情報から大量のアウトプットが得意な生成AIの出現なども踏まえ、単なる個別知識の集積ではない深い意味理解を促すことや、学ぶ意味や社会とのつながりの更なる明確化が求められる。

国語科教育においては、文章から情報を取り出すことだけでなく、その情報はどのような効果があるのか、それらはどのように生かしていくとよいのかという思考を伴うアウトプットをしていくことなど、学習内容についての深い理解を伴ったうえで、「**児童一人一人が意図をもった学びを展開する力**」を育成する必要があると考えている。

2 学習内容や学習方法を選択し、
自らの意図をもって学ぶ力を育む授業のアイデア

第5学年「固有種が教えてくれること／自然環境を守るために」（光村図書）において、児童が学びのゴールを選択し、自らの学習計画に沿って学びを進めていくために、次のような設定をした。

①「固有種が教えてくれること」では、図表やグラフの効果について、そのよさを交流し合う。

これまでの単元の学習において、児童は「〇〇の力を付けるために学習している。」という意識をもつことはできよう

になってきた。本単元では、「固有種が教えてくれること」を通して、各資料の効果について考え、文章の内容を捉えることができた。自分が気になった資料を選択し、その資料にはどのような効果があるのかを考え、各資料が文章とどのように結びついているかを整理した。グループ学習で資料の効果について自分の考えを共有した。児童は、この学習を通して、自ら選択した資料について、他者に理解してもらえらることを楽しいと感じていた。

②「自然環境を守るために」では、自分の家ではどのようなことができるかを提案する。

「自然環境を守るために」では、自分が伝えたいことに対して、資料をどのように活用すると効果的かを考えることを学習の中心にして取り組んだ。児童が自ら学習内容を選択することができるように、各家庭の自然環境に関する課題を話し合った。ある児童の家庭では、電気をつけっぱなしにしてしまうことが多いこと、別の児童の家庭では、近いところでも車を使用してしまうことなど、家庭の事情は様々であるため、それぞれの事情に合わせた提案を考えた。

③家の現状を踏まえ、提案する内容にふさわしい資料を取材、選択する。

伝えたいことに関する資料を集める段階では、時間だけを設定し、児童が選択し、意図をもって学習を進められるようにした。本校で行っている総合的な学習の時間の環境教育に関する資料を用いたり、学校図書館やタブレット端末を用いてインターネットから探したりとそれぞれが意図をもって学習に取り組んだ。持ち寄った資料について検討する時間を設けることで、独りよがりの文章にならず、互いの学習進度や意図を共有することができ、インターネットから集めた資料の信憑性や伝えたいことと本当に一致しているかを吟味することができた。

④仲間の意見を聞く場合、自分の学習の進み具合を説明し、アドバイスをもらうようにする。

構成や文章に書き表す際は、グループ隊形での学習スタイルで取り組んだ。児童によっては、必要な時には仲間にアドバイスを求め、書き表すことができた。

単元終了後には、各家庭に持ち帰り実際に文章を読んでもらい、資料の使い方について、フィードバックをもらうことができたようにした。

単元終了時、ある児童は次のような振り返りを書いた。

グループの子、同じテーマを選んだ子と交流をして、資料の使い方のよさや感想をお互に見つけられました。同じテーマの子でも違う資料を使っていたことから、自分の資料の使い方と比較して考えることもできました。この単元では、資料の効果について考えたけど、家の人に伝わってよかったし、これからも資料の効果を考えて使っていきたいです。

このように、付けたい力を意識しながら、児童が学習内容や方法を選択できる学習スタイルを構築していくことが、「児童一人一人が意図をもった学びを展開する力」を育成することにつながると考えている。

社会科

これからの社会科に求められる
資質・能力と授業のアイデア



新潟県新潟市立上山小学校
裏田 雄大

1 これからの社会科に求められる資質・能力

近い将来、必ず訪れる未来として、人口減少と科学技術の向上が挙げられている昨今、社会は更に急速に変化し、先を見通しにくくなっていくと考えられる。

このような社会を子供たちがたくましく生きていくためには、子供たち自身が急速な社会の変化に積極的に向き合い、膨大な情報を適切に見極め、知識を概念的に理解していく必要がある。

そこで、これからの社会科では、変化の激しい社会の「**本質を見抜く力**」の育成が求められる。

2 「本質を見抜く力」を育む授業のアイデア

変化の激しい社会の「本質を見抜く力」は、集めた情報を多面的にまたは批判的に吟味する活動の中で子供に育つ資質・能力であると考えられる。

以下、第6学年社会科の聖武天皇が国を治めた頃の学習を例に示す。

時	学習活動
1	聖武天皇の働きを調べる学習問題を設定し、学習計画を立てる。
2	東大寺の大仏の造営の様子や聖武天皇が込めた願い、国分寺と国分尼寺の建立、鑑真の招聘などを調べる。
3	
4	
5	調べたことを関連付けてまとめた後、聖武天皇の働きを吟味する。

第1時は、一斉学習の時間である。聖武天皇が国を治めた頃の世の中の様子と聖武天皇の肖像画を提示し、「聖武天皇はどのようにして、こんなに大変な日本を治めようとしたのか。」と学習問題を設定した。その後、東大寺の大仏、国分寺と国分尼寺、鑑真の招聘を提示し、学習計画を一人一人が立てるように促した。

第2～4時は、個別学習の時間である。一人一人が立てた学習計画に沿って、教科書、資料集、インターネットから情報を集めた。

第5時は、一斉学習の時間である。集めた情報を関連付け、「聖武天皇は、混乱していた日本の人々を仏教の力で治めようとした。」などとまとめていった。

この後が集めた情報を多面的にまたは批判的に吟味する活動である。税の取り立てに苦しむ農民の様子を提示し、「聖武天皇がしたことには納得できるか、納得できないか。」と問い、話し合う活動を設定した。以下、抽出児の振り返りの記述の一部分である。

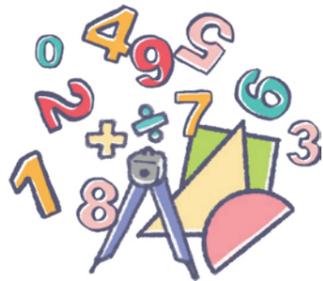
A 児	大仏を建てることで農民が余計大変になってしまおうし、苦しい生活がもっと苦しい生活になってしまうのではないかと思った。聖武天皇が大仏を建てた理由はすっきりしたが、農民のことを考えると納得できない部分があると思った。
B 児	なぜ聖武天皇は地震や干ばつが起きているのに、そっちの対策をとらないで仏教で国を治めようとしたのか、なぜ大仏を造れば国が安定すると思ったのか、最初から最後までずっと不思議だった。でも仏教で国が安定したなら、結果はよかったと思う。

これらは、聖武天皇の働きの価値や立場性などを吟味し、解釈しようとしている姿だと考えられる。聖武天皇という為政者の立場からだけでなく農民の立場から吟味したり、国が安定したという結果からその価値を捉え直したりしており、情報を多面的にまたは批判的に吟味する思考が促されている。

このように、視点が変わる事実を提示したり発問したりすると、集めた情報を多面的または批判的に吟味する思考が促されることが分かった。このような活動を通して、膨大な情報を適切に見極め、知識を概念的に理解し、変化の激しい社会の「本質を見抜く力」を育みたい。

算数科

これからの算数科に求められる
資質・能力と授業のアイデア



滋賀県草津市立志津小学校
杉本久美香

1 これからの算数科に求められる資質・能力

これからの社会では、「正解」のない問題を解決しなければならない。そんな問題に対して、あきらめことなく「最適解」を求めて取り組むのに必要な力として、私は「認識・選択・探求」を挙げたい。「認識・選択・探求」は、物事を最後まで成し遂げるために必要な能力である。

算数科の学習では、常に新しい学習問題と出会い、その解決に向けて取り組む。私は、その解決に至るまでのプロセスを重視し、次の3つのスキルを育てたい。

- ① 問題を認識するスキル
- ② 解決方法を選択するスキル
- ③ 解決方法を探求するスキル

2 「認識・選択・探求」を育む授業のアイデア

① 学習問題から「はてな(問い)」見付け

例えば、小学5年「分数のたし算」の学習単元で「 $\frac{1}{2} + \frac{1}{3}$ を計算しよう。」と出題する。子供たちは、小学4年のときに同分母のたし算の計算方法を学んでいるので、答えを $\frac{2}{5}$ としたくなる。しかし、それが誤りであることに気付くと、子供たちに新しい「はてな(問い)」が生まれる。「異分母の分数のたし算は、どう計算すればいいのだろうか？」

このように、新しい学習問題に取り組む際、子供たちには、既習内容との比較などを通して、自ら解

決すべき「はてな(問い)」を見付ける習慣を付けたい。そうすると、子供たちは、題意や目的など問題の本質を見極めようとする思考になる。これは、問題を認識するスキルを高めることにつながると思う。

② 学習活動を選択する「フリー学習タイム」

例えば、小学6年「場合の数」の単元終末で「5つのトッピングを使って作ることができるピザの種類は、全部で何種類だろう。」と出題する。子供たちが解き始めると、一人で解ける子、解き方に自信のない子、解き方がわからない子など差が出てくる。ここで、「フリー学習タイム」を設定する。

「フリー学習タイム」とは、子供たちが学習活動を選択できる時間である。子供たちに自分の学習状況を示す色カードをタブレットPCで提出させ、電子黒板に表示する。

(赤…教えて！ 黄…考え中！ 青…解けた)

子供たちは、この表示を見ながら次のような学習活動を自ら選択していく。

- ・引き続き、自分で解き方を考える活動
- ・分からないことを友達に聞く活動
- ・友達の考えから解き方を再考する活動
- ・自分と友達の考えを比較する活動 など。

このように、「フリー学習タイム」を設定すると、子供たちは自分の学習状況を判断して主体的に学習活動を選んで取り組むようになる。これは、解決方法を自ら選択していくスキルを高めることにつながると思う。

③ 既習内容(スタディ・ログ)の活用

例えば、小学3年「あまりのあるわり算」の学習単元で「70枚の折り紙を3人で同じ数ずつ分けると一人分は何枚になるだろう。」と出題する。ここでは、単純に答えを出すのではなく、解き方を考える学習を行う。10と1を図で示して解く方法や10と1がいくつ分になるかを言葉にして解く方法など、これまでの学習で学んだ考え方を想起させたい。このとき、有効なのが「スタディ・ログ」である。

「スタディ・ログ」は、学習に関する情報(板書、自分や友達の考え、振り返り等)を子供たちが自らデジタル化して記録したものである。このログの活用により、子供たちは新しい学習問題に対して既習内容を活かして解き方を考えようとする思考になる。これは、解決方法を探求しようとするスキルを高めることにつながると思う。

理科

これからの理科に求められる
資質・能力と授業のアイデア



鹿児島県出水市立西出水小学校
鮫島圭介

1 これからの理科に求められる資質・能力

これからの理科に求められる資質・能力の一つは、「観察力」だと考える。この観察力は、具体的に次のような力だと設定する。

- ・自然事象を見る力・観点を基に見る力。
- ・見た事実を基に、考え察する(解釈)力。

この観察力が、理科に求められている資質・能力だと考えた理由は、以下の通りである。

まず、観察力は、子供の理科の学びの様々な過程で頻りに用いられる力と考えるからである。例えば、「問題を見いだす」「予想や仮説、方法の発想」「観察、実験の事実を捉える」「事実を基に考察する」という理科の問題解決のどの過程でも観察力を用いているといえる。子供の学びを支える基盤となる力になっている。また、観察活動は、理科が始まって以降、大切にされてきて、観察力を発揮することで、自然認識が深まるといえる。

次に、観察力は、自分たちの生活をよりよくすることにつながる力と考えるからである。例えば、人は、自然事象と共生し、目の前の自然事象を多く見てきた。その中で、巧みさや凄さに驚いたり感動したりして、心を豊かにしてきた。自然事象の本質、生存戦略や巧みな構造と機能に気付き活用したからこそ、技術革新し、社会発展してきた。観察力を発揮したからこそ生み出された自分たちの営みだといえる。

このように、観察力は、理科の授業だけに留まら

ず、日常生活でも発揮され、これからの社会を生き抜いていく子供たちの未来を創造することにつながる力だと考える。

2 観察力を育む授業のアイデア

観察力を育む授業は、様々な授業場面に取り入れることができ、以下の3点を留意する。

- ① 自然の事物・現象と子供の距離を近づけ、身近な存在にする。
- ② 自然の事物・現象を見ている子供と一緒に becoming 見る。
- ③ 見るを「観る」「考え察する」という行為に価値付け、方向付ける。

例えば、小学3年生「モンシロチョウの成長と体のつくり」の授業で考えてみる。まず、モンシロチョウの卵を一人一つずつカップの中で継続飼育という活動を設定する。この中で、子供たちは見ることを繰り返し行うことができる。このように、自然事象を子供の近くに持ち込み、子供の身近な存在にすることに留意する。

次に、教師は、じっくりモンシロチョウを見ている子供の傍に行き、一緒になってモンシロチョウを見る。「しっかり観察しなさい。」と教師が指示するのでなく、子供に負けないくらいじっくり見ることに留意する。このように、私たち教師が、モンシロチョウを面白がって見る気持ちを忘れないようにする。

そして、モンシロチョウと一緒に見て発見したことを共有する。その際、着目した観点を整理し、価値付けながら「観る」へと方向付けていく。学級集団の学びであれば、それを広げていくことも大切である。更に、観た事実と、考え察したことを分けて整理し、解釈を広げられるように留意する。事実からどのように考えたかを大切にす。

このように、教師が、観て考え察することを子供と一緒にやり、楽しむ。そんな教師の姿を見た子供たちは、先生の観察力をモデルにするようになる。そうして観察を楽しみ、観察力が高まった子供たちは、様々なことを観て考え察することへの意欲が高まることを期待できる。結果、主体的に生きていくことを助ける力となるのではないかと考える。今後も、まずは私自身が観察力を磨き、子供と自然事象の観察を楽しみたい。

特別活動

文部科学省初等中等局教育課程課教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター
研究開発部教育課程調査官

和久井 伸彦

プロフィール

さいたま市立小学校教諭、さいたま市子ども未来局幼児政策課主幹、さいたま市立小学校教頭を経て、令和6年4月より現職



はじめに

学級や学校は、児童にとって最も身近な社会である。児童は、こうした社会の中で、特別活動における様々な集団活動を通して、多様な人間関係の築き方や、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決することなどを学んでいく。

しかし、学校教育を取り巻く環境の変化が加速し、児童一人一人の考え方も多様化してきている。また、特別な支援を必要とする児童数や外国人児童数、貧困、いじめ重大事態や不登校児童数の増加など学級や学校における課題も多様化してきている。更に、インターネットの普及に伴い、検索をすると、必要な情報が優先的に表示されるという良さもある一方で、考え方が固定化され幅広い意見や考え方に触れることが減ってしまうことも懸念される。このような状況だからこそ、互いを尊重し合う温かい人間関係を築き、自己有用感を高める特別活動の実践が求められる。

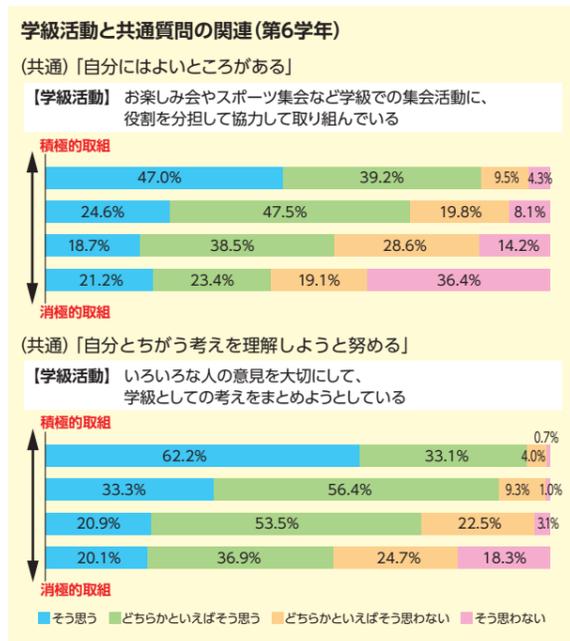
1 学習指導要領の全面実施5年目を迎えて

「令和4年度小学校学習指導要領実施状況調査について(検討状況の報告)」の結果が、令和6年7月に速報版として公表された。この調査は、小学校学習指導要領の次期改訂に資するため、今次改訂の改善事項を中心に、各教科等の目標や内容に照らした児童の学習の実現状況について調査研究を行い、検討の基礎となる客観的データ等を得るとともに、教育課程の基準に係る課題の有無及びその内容等を検証・総括するために行われた。

特別活動においては、平成29年告示の学習指導要領の改訂のポイントを踏まえた設問を設定し、児童は質問紙、教師はオンラインで回答した。

その集計結果について、成果と課題の一部を紹介する。

図1 学級活動と共通質問の関連



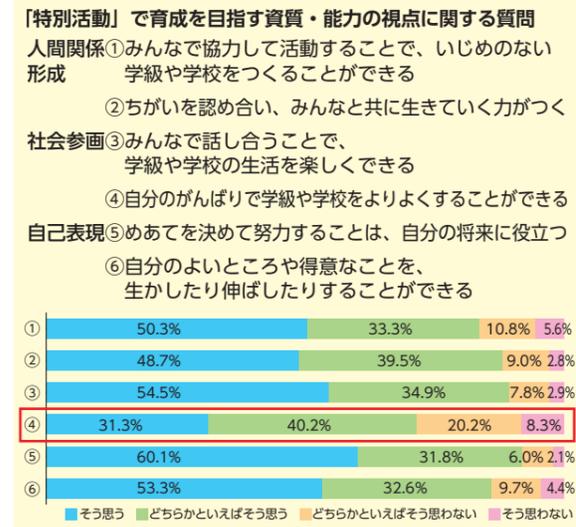
まず、成果についてである。

児童質問紙調査(6年)における学級活動の取組に関する項目と共通項目の関連を検討するためにクロス集計を行った(図1)。

その結果、学級活動に積極的に取り組んでいる児童は、自己肯定感や自他理解、協働、粘り強く取り組む態度に関する項目について肯定的な回答をする傾向が見られた。

また、特別活動で育成を目指す資質・能力の三つの視点(「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」)に関する6項目の質問のうち、5項目については児童の肯定的な回答(「そうしている」「どちらかといえばそうしている」)が80%を超えている(図2)。

図2 育成を目指す資質・能力の三つの視点に関する調査結果



このことから、特別活動において得られる効力感が高いと言える。

その一方で、課題として「社会参画」に関する質問である「④自分のがんばりで学級や学校をよりよくすることができる」についての肯定的な回答が70%程度と他の質問項目よりも低い結果となった。

2 社会参画意識の向上を目指して

特別活動で育成を目指す資質・能力の三つの視点の『社会参画』に関して課題があることを踏まえ、特別活動において『自分のがんばりで学級や学校をよりよくすることができる』と実感できるように活動の充実や指導の改善を図ることが大切になる。そこで、以下のことに留意して指導することが考えられる。

(1)生活上の諸問題に気付く目を育てる

社会参画意識を高めるためには、教師に言われたことに取り組むだけでなく、自分たちの学級や学校生活をよりよくしていこうとする諸問題に気付く目を育て、自分たちで解決していくことが重要になる。

ア 議題箱(ポスト)の設置

よりよい生活をつくるために「もっとこうしたい」と思った時にいつでも学級へ提案できる環境を整えておく必要がある。そのために、学級ごとに議題箱(ポスト)を設置するとともに、そのそばに議題提案カードを用意しておくことが望ましい。

イ ICT端末の活用

クラウド上に議題を提出できる共有フォルダ等を準備し、いつでも提出することができるようにすることが考えられる。児童同士が議題案を見合うことができれば、友達と同じような考えを抱いている場

合には安心して議題を提出することができたり、友達の考えを参考に自分の経験や考えを踏まえて新たな議題を考えたりすることにもつながる。

ウ 議題例の共有

これまでの学級会の経験によって生活上の諸問題に気付く力に差が生じることもある。そこで、学級活動オリエンテーションとして教師から朝の会・帰りの会等に議題例を複数提示して、児童の問題意識を高めていきたい。

学級活動(1)においては、自分たちの生活上の問題を自分たちで気付き、自分たちで話し合って、実践し、解決をしていく学習過程を大切にしており、問題に気付くことがその第一歩であるためとても重要となる。

(2)振り返りを充実し、次の課題解決に生かす

活動して終わりではなく、自己の取組や実践を振り返り、次の活動や課題解決に生かすことが大切である。その際には、振り返りの視点を示すなどして、実践に向けて準備してきたことや工夫して取り組んだことなどを振り返ったり、自分の頑張りや学級や学校をよりよくできたという実感が湧くようにしたりするなど、次の活動への意欲へとつなげていく。また、こうした自己評価だけでなく、相互評価により、自分の気が付かなかったよさを認められたり、友達と関わる中で友達のよさに気付いたりする活動を取り入れることで自分への自信がもてるようになる。更に、大切なのは、教師が解決を図ろうと粘り強く取り組む態度や活動の結果だけでなく過程における努力など、児童一人一人のよさや可能性を積極的に認めて声を掛けるようにすることである。こうして、取り組んできたことのよさが認められることで児童一人一人の自己有用感が高まるとともに、自己効力感や自己肯定感も高まり、学級や学校生活をもっとよくしていきたいという気持ち生まれ、新たな課題の発見につながっていくことが期待される。

おわりに

第4期教育振興基本計画では、2040年以降の社会を見据えた教育政策におけるコンセプトとも言うべき基本方針の一つとして「持続可能な社会の創り手の育成」が掲げられた。児童一人一人が集団や社会の形成者として生活上の諸問題に関心をもち、これからの社会を切り拓いていくことができるように特別活動における様々な集団活動を通して資質・能力を身に付けていく必要がある。

校長として 大切にしていること

東京都豊島区立清和小学校長
酒井由江

豊島区SDGsフェスティバル
清和小学校6年生
「世界に誇る日本の伝統文化」
発表より



1 全ての教職員を見る

私は、「遠くにいる教職員ほど意識して声をかける」という先輩校長の教えを実践し、積極的に全ての教職員と対話することを心掛けている。職層や年齢、性格によって、管理職とよく話す機会のある教員とそうでない教員がいる。また、給食調理員、用務主事などの職員や時間講師とは、会話する機会が少なくなりがちである。しかし、意外にもこうした職員が学校の課題に気付いている場合が多い。全ての教職員をしっかりと観察し、話を聞くことが経営者としての基本だと考える。

昨今、放課後に、職員室でPCに向かう教員の姿が多く見られるようになった。教職員は、自己の成長を感じる時もあるが、日々課題に悩むことが多い。ICT化が進む中でも、教職員同士の対話や協働、風通しの良い職場環境は課題解決の力となる。そんな教師の姿を大事にしたい。また、今年は、年度途中で職員室の席替えを行った。環境の変化による新鮮な心持ちと協働の促進を図ることができた。

2 学びの本質

本校では、「豊かな表現力を身に付け、主体的に学び合う子どもの育成」をテーマに、国語科の「話す・聞く」に重点を置いた授業づくりを進めている。私は、授業を通して児童を育てることを経営の柱としている。

また、学習指導は基本的に学校の時間内で完結す

べきだと考える。学校は、宿題を出すことが当たり前とされているが、その提出確認や未提出児童への指導に、多くの時間が割かれてきた。児童の学力や放課後の生活環境が異なる中、同じ内容・量の宿題を課すことには課題が多い。

そこで、本校では今年度から宿題を廃止し、代わりに「家庭学習」を取り入れた。児童や保護者に方針を説明し、児童一人一人が意欲的に学べるよう手引きや学習内容を提供した。その結果、児童の一生懸命に取り組む姿が見られ、個の生活環境に応じた家庭学習に大きな変化と成果を感じた。

3 学校経営者として

今年度より月に一度、定時退勤日として、午後は授業も会議も一切入れない日を設けた。教職員は自分の時間として教材研究をしても良いし、年休をとって退勤してもよい。これは、教職員の時間を有効に使えるということで大変好評であった。

稲盛和夫氏の著書『生き方』には「今を大切に生きることが魂を磨き、困難を乗り越える力となる」とある。校長として信念と愛情を持ち、教育に情熱を注ぐことが、子供、保護者、教職員の幸せにつながると信じている。

本校は巣鴨地蔵通り商店街という歴史ある地域に位置し、児童は地域の伝統や文化に触れながら成長している。私は、地域の中にある学校として、教師が生きがいを感じて働き、児童が友達と学ぶ喜びを感じられる学校を目指して日々努力を続けている。

おすすめの本

教育ジャーナリスト
渡辺敦司

日本列島はすごい(中公新書)



著者：伊藤 孝
【発行元：中央公論社】

理科が不得意という小学校教員は少なくない。地学なら、なおさらだろう。しかし茨城大学教育学部教授で地質学・鉱床学と地学教育を専門とし、NHK高校講座の講師も務めた著者の本は「すごい」の一言に尽きる。

「昔、なにを思ったか、公務員宿舎のベランダにプリンターを置き…」「かれこれ20年近く前、羽田から北海道の女満別へ飛んだときだと思いが…」各章の書き出しは、こんな調子で始まる。序章によると本書のアプローチは▽この列島の特徴・成り立ちを振り返る▽この列島が持つ資源について考える▽(伝統、風習、しがらみと既得特権による)窮屈さからいったん自由になり、この列島での暮らし方、もしくは列島の使い方について、押さえるべき原則を示す——というものが、理系本に特有の堅苦しさは一切ない。専門的な説明でさえ、エピソードから一気に読ませる。

日本が災害列島だと痛感させられるきっかけとなった阪神・淡路大震災から30年を迎えた。しかし九州の火山噴出物が関東に堆積するような巨大噴火が起こっていないのは「7000年間の僥倖」なのだという。今年が7000年目かもしれない。

想定外の事態にも身を守る防災教育はもちろん「気候と地質の条件は『お国柄』を醸成し、国土の個性となる」「列島の資源を眺めておくと、日本史の新しい一面が見えてくる」(まえがき)ことを具体的に示した本書は、授業のネタの宝庫だ。

終章の最後に「『すごい』の意味を辞書で引いてみよう」という呼び掛けが出てくる。ここではネタバレをせず、宿題としておこう。

次世代の学校教育を考える ～有識者24名の提言～



(一財)総合初等教育研究所編
問い合わせ先
TEL 058(398)6633
FAX 058(398)2822

令和6年12月25日、中央教育審議会に①初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について②多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成を加速するための方策について——が諮問された。学習指導要領の改訂(小学校は2027年告示、30年度から全面実施の見込み)にとどまらず、学校運営や教育条件整備も含め「学校・教師・公教育を再定義し再構造化する歩み」(奈須正裕・上智大学教授、令和6年11月の中教審初等中等教育分科会「義務教育の在り方ワーキンググループ」)で始まる。

しかも、現行学習指導要領の趣旨が十分に伝わっていなかったとの反省から、審議の最中でも資料を学校や教育委員会にとって徹底的に分かりやすいものとしたり、審議状況をウェブサイト・動画等で積極的に発信したりするという(令和6年9月の「今後の教育課程、学習指導及び学習評価等の在り方に関する有識者検討会」論点整理)。教育現場にとっては主体的に次期学習指導要領の在り方を考え、改訂論議に参画するチャンスでもある。

そんな時、導きの糸となるのが本書だ。第1章「これからの学校教育」では元文部省初等中等教育局長の辻村哲夫氏、これまでの改訂に携わった安彦忠彦・天笠茂氏ら一級の論者(筆者を除く)が過去や自らの仕事を踏まえながら未来を展望し、第2章「これからの学習指導～次期学習指導要領を視野に入れて～」では各教科等からの提言がそろっている。まさに「教師が授業に負担を感じることなく、教職の楽しさと重要性を実感しながら、子供たちの指導に打ち込むことができる指導基準」(北俊夫参与の序章)にしたいものだ。